

## 徐霞客とその遊記

薄井俊二

はじめに

私は九州大学で中国哲学史を学び、はじめは戦国秦漢時代の中国古代思想史を研究していた。その後、地理的な事象や著述について思想的な研究ができないかと考え、治水水利史の思想的背景や意義、さらに山川地誌や遊記の思想的位置づけなどを考察した。その一つの成果として「天台山記」という宗教的な山岳志の解明に取り組んだ。その後、山川遊記の研究を進めているうちに、二〇一〇年頃に明末の徐霞客の「遊記」に出会い、今はその研究を中心としている。

今回はこの徐霞客について発表をしたい。なお、末尾に、徐霞客の年譜（表1）、徐霞客の研究史（表2）、徐霞客の足跡（図4）を示す。

### 一 徐霞客とその遊記

徐霞客（一五八七〜一六四一）、諱は弘祖（清朝中期以降は、

乾隆帝の諱弘曆を避けて、宏祖と表記する）、霞客は号、江蘇江陰の人。科挙の試験を受けておらず進士ではないが、当代一級の文人達と交わった郷紳である。彼が亡くなった一六四一年は、明朝滅亡の三年前で、明朝最末期の人ということもできる。

彼の名前を今に伝えているのは、「徐霞客遊記」と呼ばれている旅行日記（以下、単に「遊記」とする）。全十巻で、現存するものは漢文で約六十万字で、膨大な量のもの。一部は散逸しているが、ほぼ原型を留めていると思われる。

「遊記」第一巻は一六一三年から一六三三年までに訪れた、全国各地の諸名山川の旅遊日記であり、まとめて「名山遊記」という。いずれも三五日間ぐらいの短編の日記で、当該山川を遊覧したことを記す。こうした短編・当該山川の遊記は、中国では長い伝統があり、多くの文人達が残している。よって、客観的記述を旨とする徐霞客「遊記」の特徴が見られはするものの、とりわけて特異なものではない。

第二巻以降が、「遊記」を特徴づけるもの。一六三六年から四年間で、中国南西部を踏破したことを記した「西南游日記」である。「遊記」全体の九割を占める。四年間、ほぼ間断なく書き綴られており、詳細な記述のものとなっている。その足跡は、丁文江が初めて作った地図に記されているとおりである（後掲「図4」参照）。

徐霞客については、日本ではほとんど知られていないだろうが〔一〕、大陸中国では非常に有名である。「遊記」は地理に関わる様々な自然事象・形象、人文にかかわる事柄を客観的に観察し、考察を加え、記述したものとなっている。そこから、徐霞客自身は、旅行家、あるいは地理学家という位置づけをされ、「遊記」は、西洋近代地理学に先んじた科学的成果を挙げたものとして高く評価されている。特に鍾乳洞などを多く観察していることから、カルスト地形の研究においては世界の先駆者であるとも言われている〔二〕。

現在でも毎年たくさんの研究書や一般書が出版されており、徐霞客に特化した「徐霞客研究」という専門雑誌も四十号を重ねている。

また歴史の教科書にも取りあげられている。「中国史」の参考書では「明代の学術」の項目において、李時珍や宋応星と並んで、徐霞客が大きく取り上げられている。さらに、中国海軍には「徐霞客号」という名の軍艦もある。そして、中国では、「五月十九日」を「中国旅行の日」としているが、それは「遊記」の最初の記述がなされた日付にちなむものである。

以上みてきたように、中国における徐霞客の知名度は高く、

長い研究の歴史を持っている。しかしその一方で、二〇〇四年の呂錫生の『徐霞客研究集成』（中国書籍出版社）という、それまでの基礎的な研究を集大成したもので以降は、中国大陸における徐霞客の研究は停滞していると言わざるを得ない。旅行の行程を細かくたどるなどの細分化した研究があるものの、徐霞客の地理や地学に関する思想を深く掘り下げたり、全体像を描き出そうというものは出ていない。あたかも徐霞客には、まとまった地理の学概念がなかったかのようである。

しかし、私見では徐霞客には、中国の大地のありようについて一つの明確な考え、「説」があったと考えている。現在の中国の学界でも、一般でもことさらに無視されているこの「説」については後ほど述べることにする。

## 二 「徐霞客遊記」を読む

次に「遊記」の文章を若干見ていく。

### ①遠望

「遊五臺山日記」八月六日条

登南臺絶頂、有文殊舍利塔。北面諸臺環列、惟東南・西南少有隙地。正南、古南臺在其下、遠則盂縣諸山屏峙、而東與龍泉崢嶸接勢。

南臺の頂上に登る。……北を見ると数多くの峯がぐるりと取り巻いているが、東南と西南に少しばかり隙間がある。

真南を見ると、旧の南台が下の方に見え、遠くに目をやる

と孟鼎の山々が屏風のように並んでおり、東側にある龍泉あたりの山々と接している。

五台山の南台から北の眺望と、真南の眺めを述べている。遠景を、見えるがまま過不足なく描き、余計な装飾などはしていない。

## ②近景

「浙游日記」十月四日条

沿小澗而上。石皆峽躡壑透、清流漱之、淙淙有聲。澗兩旁石片踊出田畦中、側者成塍、突者成臺。

小さな溪流に沿って登る。その石は峽谷に蹲ったり、崖から飛び出ししているかのようで、そこに清流が注ぎ、せせらぎの音を立てている。溪流の兩岸に踊り出でている石片はまるで田畑の畦のようで、斜めに立っているものは畦のようで、突起しているものは平らな台のようである。

屏之南即明洞也。如軒斯啓、其外五柱穿列、正如四明之分窗。中有一柱。上不至簷、簷下亦垂一石、下不至柱、上下相對、所不接者不盈咫。

その屏風のような巖の南が明洞である。樓閣の軒がそこを開いているかのようで、外には五本の脊柱が突き立っている。まさに四明山の「分窗」のようである。その中の一本は、上に伸びているが軒の庇には至っておらず、庇からも石が

垂れているが下の柱までは至っていない。上下にあい対していて、その隙間は二十センチメートル以下しかない。

南者爲水洞。一轉即仙田成畦、塍界層層。水滿其中、不流不澗。人從陞上曲折而入。

南は水を湛えた洞がある。水はひとめぐりすると、すぐに仙人の水田をなし、畦が何層にも整っている。水が水田に満ち満ちており、外に漏れ出ることもなく、かつ干上がることもない。人は畦を踏んで曲がりながら洞に入る。

ここで言う「水田」は、水を張った実際の稲田ではなく、いわゆるリムストーンプールであり、日本の秋芳洞の百枚皿のような、カルスト地形における二次生成物のことを指している。

以上の文は、浙江省の洞山を探索した時の記事である。溪流沿いの光景や洞穴にある鍾乳石や石筍、またリムストーンプールなどが写實的に描き出されている。美辭麗句や先人の詩文からの引用も無く、自然を鑑賞して自らの人生を顧みたり、故郷の人を思い出したりもしていない。ただただ写實的な記述に終始している。しかしながら、ありのままの自然の美しさや神秘さを、見事に描き出している。

こうした記述が「遊記」のほとんどを占めている。

### 三 「遊記」の評価

次に清人の徐霞客、「遊記」の評価を見てみる。

①潘耒（一六四六—一七〇八）の「徐霞客遊記序」

「遊記」の記述の仕方について、清人の潘耒は高く評価して次のように述べている。

先審視山脈如何去來、水脈如何分合、既得大勢、然後一丘一壑、支搜節討。

登不必有徑、荒榛密箐、無不穿也。涉不必有津、衝湍惡瀧、無不絕也。峯極危者、必躍而踞其巔、洞極邃者、必猿掛蛇行、窮其旁出之竇。

その方法は、まず山脈がどこからどこへ去來しているか、水脈がどのように分岐したり合流しているかを觀察する。そうして地勢のあらましを把握した上で、ひとつひとつの丘や谷について、その細かい支節まで調べ求めるというものだ。

道なき山に登るのに、生い茂った藪や密生する竹林であっても、必ず押し破って登った。渡し場のない川を渡るのに、大波の急流や凶暴な早瀬であっても、必ず渡り通した。危険な峯でも、おどろいがあってでもその頂に至った。奥深さを窮める洞穴でも、猿のようにぶらさがったり、蛇のように身をくねらせて匍匐前進しながら、脇から出る穴まで窮めないものはなかった。

徐霞客が、山脈水脈という大地の全体像を把握しようとしていることに注目しており、どんなところへでも、危険を顧みず実地に赴き、觀察と描写をしたことを評価する。

記文排日編次、直敘情景、未嘗刻畫爲文、而天趣旁流、自然奇警。山川條理、臚列目前。土俗人情、關梁阨塞、時時著見。

遊記の文章は、日を追って順序立てて並べられている。情景をありのままに叙述しており、文学的な雕琢を加えられることは全く無い。それでいて天然の韻趣があつて、流れるように流暢で、自然で優れている。山川の筋道が、目の前に連ね並べられているかのようにありありと分かる。土地の風俗や人々の心情、関門と橋梁や険しい場所に設けられたとりでなど、いつもはつきりと目に見えるようである。

「遊記」の文章は文学的な彫琢がない素朴な文体だが、まるで目の前に見えるような写実性と詳細さがあるとして高く評価している。

②李慈銘（一八三〇—一八九四）の「越縵堂讀書記」

一方、同じ清人の李慈銘は、以下のように、徐霞客の旅遊、及び「遊記」の文章を全く評価していない。

然山水之文、必資雕刻。

登臨之興、所貴適情。

霞客梯險縹虛、身試不測、徒標詭異之目、非寄賞會之深。

古人癖嗜烟霞、當不如是。

而又筆舌冗漫、叙次疏拙、致令異境失奇、麗區掩彩、

記路程無從知徑、討名勝者爲之不怡。

且其注意頗在脈絡向背、同于青鳥之術、尤爲無謂。

山水を描く文章は、必ず雕琢が施された洗練されたものであるべきである。

高い山に登り淵に望むときの感興としては、大切なことはゆつたりとして情にかなったものであるべきである。

しかし、徐霞客は危険な険しいところに梯子を掛けて登ったり、我が身に不測のことへ挑んだりしている。徒に詭異なものを見ようとして目を標わけており、美を鑑賞し

ようという深みを持っていない。

古人のように自然をたしなむ者は、決してこのようであってはならない。

そのうえ言葉は冗長で、文は粗略で稚拙。せつかくの異境は「奇」を失い、美しい場所はその「美」を覆い隠されている。

路程を記録しようとするものにとっては道筋を知る手立がなくて、名勝を訪ねたい者にとっては不満が残る。

加えて彼の興味は山脈水脈の方向にあつて、これは風水の術と同じである。この点は最も意味がないことである。

李慈銘は、このように否定的評価をしている。

しかし、潘耒の評価と李慈銘のそれとを比べると、実は両者には共通点が見られる。「遊記」は、文章に雕琢が施されておらず、目に見えることを写實的に記しているのが特徴であるとする。潘耒はそれが素晴らしいと言い、李慈銘はそれが欠点だとしている。このように、プラス評価とマイナス評価というベクトルは逆向きだが、「遊記」の特色を捉えるという点においては、両者は一致していると言える。

そして評価は逆だが、「遊記」の特色として両者が同じく着目していることに、徐霞客の興味関心が山脈と水脈にあつたとすることがある（二重傍線部）。

潘耒は「その方法は、まず山脈がどこからどこへ去来しているのか、水脈がどのように分岐したり合流したりしているかを観測する。そうして地勢のあらましを把握した」とする。一方、李慈銘は「加えて彼の興味は山脈と水脈の方向にあつて、これは風水の術と同じである。この点は最も意味がないことである。」としている。潘耒は山脈と水脈の探索が地域の全体像をつかもうとしているものだとしてプラス評価をしているが、李慈銘は風水の術に通じているとして極めて否定的に評価をしている。しかし、いずれにせよ、徐霞客は「地」の「脈」についての「説」を抱いていたという点においては一致している。

徐霞客と山脈水脈との関わりについては、中国の学界などではほとんど語られない。李慈銘がいうがごとく山脈水脈の探究というものは風水の術に通じるものである。徐霞客を自然科学の一つである地理学の先駆者と位置づけ、顕彰し、崇拜する現在の中国においては、彼が占術に近いところにいたとする視点

は到底受け入れ難いものかもしれない。ことさらに目をつぶっているかのようである。しかし、徐霞客が山脈と水脈という動的な地脈の説を抱いていたことは間違いない。そこで次に徐霞客と「風水説」、中でも「龍脈説」との関わりについて概観をしていく。

#### 四 徐霞客と龍脈説

「風水説」というのは、土地のありようについて吉凶を占う占術のことであり中身は多岐にわたっているが「地氣の流れ」、地脈が重要視されているという点では一致している。

しかし、例えば、日本の風水説が、その場所、極点、局面における吉凶を見ていくのに対して、中国の風水説には各地点を結び、中国全体を統括的に捉えるスケールの大きな風水説がある。それが龍脈説である。

##### ①徐善繼兄弟の「地理人子須知」（一五六六年刊行）

龍脈説をまとめた形で述べている風水書に、明の嘉靖年間刊行の「地理人子須知」がある。徐霞客も目を通したことがあるのではないかと推測されるが、この書によって龍脈説の概観をする。

「性理大全」臨川吳氏曰、「天下之山脈起於崑崙。」……

今以輿圖考之、天下之水皆原於西北。是可見山起於西北矣。

「性理大全」において臨川の吳氏が言う「天下の山脈は

崑崙山より起こっている」と……

今地図に照らして考えると、天下の川はみな西北を源としている。ここから山脈も西北より起こっていることが分かる。

今中國在崑崙東南、而天下之山祖於崑崙。惟派三幹以入中國。

中國は崑崙山の東南に位置する。そして天下の山は崑崙山を祖とし、三つの幹の龍として分かれて中国に入っている。

朱子曰、天下有三處大水、曰黃河、曰長江、曰鴨綠江。

今以輿圖考之、長江與南海夾南條、盡於東南海。黃河與長江夾中條、盡於東海。黃河與鴨綠江夾北條、盡於遼海。

朱子は言う「天下に三大水がある。黄河、長江、鴨緑江である」と。

地図に照らして考えてみると、長江は南海とともに、南幹龍をはさんで東南海で尽きている。黄河は長江とともに、中幹龍をはさんで東海で尽きている。黄河は鴨緑江とともに北幹龍をはさんで遼海で尽きている。

大河以南諸山、則關中之山、皆自蜀漢而來。

一支至長安而盡。

關中一支生下函谷。以至嵩少、東盡泰山。

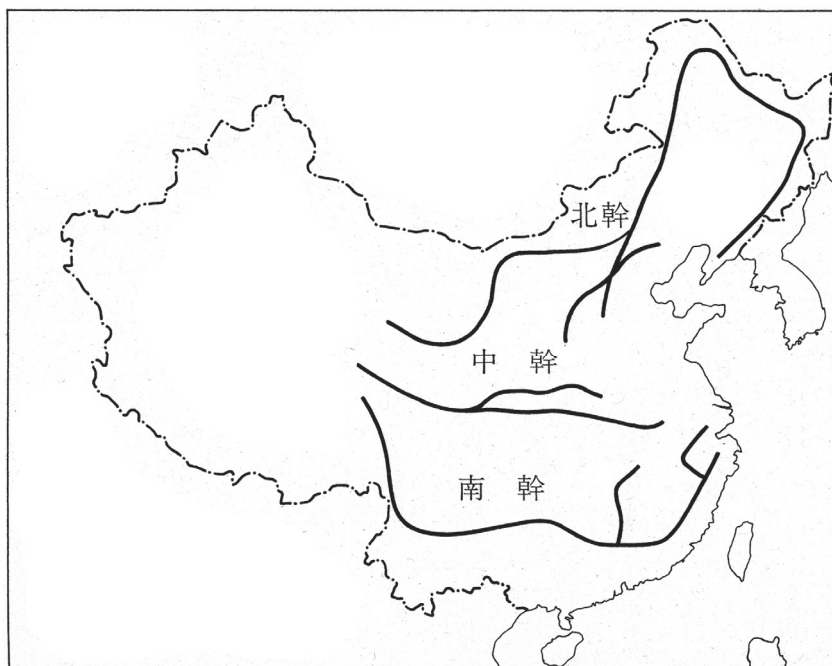
一支自蟠冢漢水之北生下、盡揚州。

大河以南の諸山は、つまり關中の山であり、皆蜀漢から来ている。

【図1】



【図2】



龍脈三幹、崑崙山といふなかば空想上の山から発した龍脈は、中国に三本が走っているとされる。

一つの支脈は長安に至って尽きる。

關中において一つの支脈が生まれ函谷関に下り、嵩山の少室山に至り、東にながれて泰山で尽きる。

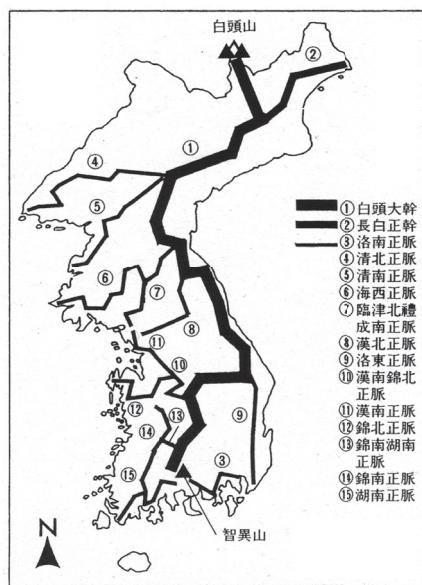
一つの支脈は、蟠冢の漢水の北で生まれて下り、揚州で尽きる。

ここで述べられていることを簡略化して言えば、中国西北部の星宿海や崑崙山あたりを源として黄河と長江という二大河川があり、中国全土を西から東へ流れているとする【図1】。そして、さらにこの大河川が枝分かれしたり、他の河川と合流したりしながら、水脈が中国全土を網の目のように覆って流れているとする。

ここまでは現代の水系の感覚と全く同じであるが、風水説では、同じように、やはり星宿海や崑崙山あたりを源として、北・中・南の幹龍（幹の龍脈）という「地気の流れる」龍脈が西から東へと流れていると考える【図2】。そして水脈と同じように地脈も枝分かれをしたり、他の地脈と合流したりしながら、地脈が中国全土を網の目のように覆って流れているとする。これが風水説である。ここでは中国全土を俯瞰的に捉え、そこを流動的な「地気」が絶える事なく流れ続けているというスケールの大きな動的な風水説が見受けられる。この大地をくまなく流れる地脈は、人間の身体、人体における「経絡」とシンクロしている。人体を流れる「経絡」が、気が流れることによって、人間が生きているように大地も生きているものと捉えるのである。

なお、朝鮮でも風水説は有力であるが朝鮮にもこの龍脈が流れ込んでいるとしている。【図3】は、朝鮮半島における山脈を辿ったものだが、【図2】に見える、中朝境に至っている中国北幹の大龍脈が、白頭山から朝鮮に流れ込んでいるとしている。これは、朝鮮の考え方であるが、陸続きの朝鮮半島は中国の龍脈をそのまま受け継いでいるという認識である。なお、日本は海に隔てられているため、中国からの龍脈は、直接は来ないということになると思われる。

【図3】



●図5—「山経表」にみる山の体系



②徐霞客の「湖江紀源」

この風水説における龍脈説とほぼ同じものを、徐霞客は「湖江紀源」という文章に書いている。

江河爲南北二經流、以其特達於海也。……按其發源、河自崑崙之北、江亦自崑崙之南。

長江と黄河は中国の南北にある二大主幹河川であるが、それはこの二つの大河だけが大海に直接注ぐ存在だからである。……兩大河の源を考えてみると、黄河は崑崙の北から発し、長江もまた崑崙の南から発している。

長江と黄河とは、どちらも崑崙山あたりを水源とし、東に流れて海に注いでいるという。

今詳三龍大勢。北龍夾河之北、南龍抱江之南、而中龍中界之、特短。

いまここで、三大龍脈の大勢を詳しく述べよう。北の龍脈は黄河の北側で中国全体を支え、南の龍脈は長江の南側にあつて中国全体を抱え込んでいる。そして中の龍脈は南北二大龍脈の中間にあつて、最も短く、

さらに北・中・南の三大龍脈があり、北と中が黄河を挟み、中と南が長江を挟んで、大河と同様に西から東へ流れている。

惟南龍磅礴半宇内、而其脈亦發於崑崙、與金沙江相持南下。

その中で南の龍脈だけが、氣勢が盛大で伸展し、中国全体の半ばまで達している。そして南の龍脈もまた（長江と同様）崑崙山から発しており、金沙江と並行して南下している。

長江と並行する南龍は、長江同様崑崙山を源とする。そしてここには、南龍の記述しかないが、おそらく三大龍脈の全てが崑崙山を源とすると考えていたとして間違いないだろう。

南龍自五嶺東趨閩之漁梁、南散爲閩省之鼓山、東分爲浙之台・石、正脈北轉爲小算嶺、度草坪驛、峙爲浙・嶺・黄山、而東抵叢山關。餘脈東趨余邑。

南の龍脈は五嶺から東へ福建の漁梁山に走り、そこから南に分散して福建省付近の鼓山へ至る。東へ分出した脈は天台山・雁蕩山となる。主脈は北に転じて、小算嶺となり、（西北に）伸びて草坪驛を通過し、聳え立っては、浙嶺・黄山となり、さらに東に進んで叢山関に至る。支脈は東に進んで、私の故郷である江陰に走る。

上記も南龍の幹脈と主な支脈の記述であるが、北龍と中龍も同様に支脈が分かれていて、中国全土に地脈が張り巡らされていたと考えていたと思われる。

以上、徐霞客は自著において龍脈説をかたっているのである。またそれに止まらず「遊記」においても龍脈に関わる記述が散

見する。

③「遊記」の龍脈説

○「江右遊日記」十月十七日条

「湖江紀源」に「南龍が草坪駅を通過する」という記載があった。その草坪駅あたりを、徐霞客が実際に通ったときの「遊記」の記述は次の通りである。

白石舖。仍轉西行、又七里、草萍公館。昔有驛、今已革矣。又西三里、即南龍北度之脊也。其脈南自江山縣二十七都之小簞嶺、西轉江西永豐東界、迤邐至此。

白石舖である。そこから転じて西へ行くこと七里で草萍公館である。ここからまた西へ三里で、南龍が北に進む背である。その脈は、南の江山県の二十六都の小簞嶺から来ていて、西に転じて江西省の永豊県の東の境域を通り、うねうねとまがりながらこの地へ至っている。

「湖江紀源」で描かれた「地氣」が流れるマクロな地脈が、草坪あたりというミクロなレベルでどのように流れているかを「遊記」において記述しているのである。

こうした龍脈、地脈の記述は「遊記」の随所に見られる。

○「浙遊日記」十月十条

浙江金華山の地脈。

蓋北山自玉壺西來、中支至此而盡。後復生一支、西走蘭溪。後支之層分而南者、一環而爲龍洞塢、再環而爲講堂塢、三環而爲玲瓏巖塢。而金華之界、於是乎盡。玲瓏巖之西、又環而爲鈕坑、則蘭溪之東界矣。再環而爲白坑、三環而爲水源洞。而崇崖巨壑、亦於是乎盡。

北山は玉壺から西に伸び、その中頃の支脈はここで一旦終わる。その後さらにまた一支脈を生み、西に進んで蘭溪まで走る。後に生じた支脈が幾層かをなしており、第一の層が廻つて龍洞塢となり、第二の層が廻つて講堂塢となり、第三の層が廻つて玲瓏巖塢となる。金華府の境域はここで終わりである。玲瓏巖の西は、また廻つて鈕坑となるが、ここは蘭溪県の東の境である。その第二層が廻つて白坑となり、第三の層が廻つて水源洞となる。ここに至って、高い崖や深い谷といったダイナミックな地形も終わりとなる。

○「楚遊日記」四月三日条

湖南省江山の地脈。

又南四里爲江山嶺、則南大龍之脊、而水分楚・粵矣。

また南へ四里で江山嶺である。ここは南大龍の背で、湖南省と広西壮族自治区との分水嶺である。

「湖江紀源」では、マクロな地脈を描き出して、中国全土を覆う龍脈を俯瞰している。そして「遊記」では、それぞれの地

域におけるミクロな地脈をたどり、確認して、大小の龍脈の現場を観察記録しているのである。ここから、徐霞客が龍脈説という、風水説に通じる考え方を確かにいっていたことが分かるのである。

### おわりに

徐霞客を科学的先駆者として祭り上げ、彼が風水説という占術とも深い関わりを持っていたことをことさらに避けているようでは、徐霞客とその遊記の研究は進まないであろう。その点、イギリスのジュリアン・ウオード<sup>(3)</sup>などは、風水説を取り込んだ上で、遊記の研究を行っており成果をあげている。

薄井自身は、風水説の検討は始めたばかりである。「徐霞客遊記」における風水説は、薄井の今後取り組むべき大きな課題だと言える。

### 注

(1) 研究者ではないが、作家の武田泰淳に「霞客」という未発表の短編小説がある。武田は、1939年に除隊してから1940年にかけて3編の短編小説を書いており、そのころの作ではないかと推測されている。雑誌「海」1979・7号に掲載された。

(2) エリック・ジツリ『洞窟探検入門』（文庫クセジュ、白水社、2003年。元刊1998年）では「表1 洞窟探検の歴史」において、「洞窟学のはしり」として「1642年 中国明代の地理学者徐霞客が中国の250の洞窟を

記述」としており、洞穴に関する記述として、徐霞客遊記が世界的にも古いものであることを確認している。

(3) Ward, Julian. Xu Xiaoku (1587-1641) The Art of Travel Writing. Curzon Press, 2001.

【表1】徐霞客年譜

西曆	年齢	回数	訪問先	遊記	
1586	1				生
1587	2				
1588	3				
1589	4				
1590	5				
1591	6				
1592	7				
1593	8				
1594	9				
1595	10				
1596	11				
1597	12				
1598	13				
1599	14				
1600	15				父没
1601	16				
1602	17				
1603	18				
1604	19				
1605	20				
1606	21				
1607	22	1	太湖		
1608	23				
1609	24	2	齊魯、北京		
1610	25				
1611	26				
1612	27				
1613	28	3	落伽山、天台山雁蕩山	遊天台山日記、遊雁蕩山日記	
1614	29	4	南京		
1615	30				
1616	31	5	白岳黄山武夷山	遊白岳山日記、遊黄山日記、遊武夷山日記	
1617	32				
1618	33	6	宜興善卷張公二洞 廬山白岳山黄山	遊廬山日記、遊黄山日記後	
1619	34				
1620	35	7	仙遊九鯉湖	遊九鯉湖日記	
1621	36				
1622	37				
1623	38	8	嵩山華山太和山	遊嵩山日記、遊太華山日記、遊太和山日記	
1624	39	9 10	母とともに、江蘇 華山；途中で引き返す		
1625	40				
1626	41				
1627	42				
1628	43	11	閩(福建)、羅浮山	閩遊日記前	
1629	44	12	北京盤山		
1630	45	13	閩(福建)	閩遊日記後	
1631	46				
1632	47	14	天台山雁蕩山	遊天台山日記後、遊雁蕩山日記後	
1633	48	15 16	五台山恒山 閩(福建)	遊五台山日記、遊恒山日記	
1634	49				
1635	50				
1636	51		浙江江西	浙遊日記、江右遊日記	
1637	52		江西湖広広西	江右遊日記、楚遊日記、粵西遊日記	
1638	53	17	広西貴州雲南	粵西遊日記、黔遊日記、滇遊日記	
1639	54		雲南	滇遊日記	
1640	55		雲南	滇遊日記	
1641	56				
1642					没
1643					
1644					

明朝滅亡

【表2】徐霞客研究史

西暦	徐霞客 勢	中国情	西暦	日本徐霞客と情勢 客	欧米徐霞 客	西暦
	【明崇禎】			【江戸】		
1640	13 徐霞客、江陰に帰郷。 「崇禎 江陰県志」（「溯江紀源」収録）。					
1641	14 徐霞客、没。陳函輝「霞客先生墓志銘」。 ？ 錢謙益「徐霞客伝」。					
1648	16 後金、世宗（順治帝）即位。		1648			
	【清順治】					
1644	2 李自成北京占領。明、滅亡。		1644			
	【康熙】					
1662	元 明の王統断絶。		1662			
1683	22 台湾降伏。清、中国完全統一。		1683			
1705	44頃 潘耒「徐霞客遊記序」。 【乾隆】					
1776	41 「遊記」初の刊本（乾隆本）。					
1782	47 「四庫全書」完成（「遊記」収録）。 【嘉慶】		1782			
1808	13 「遊記」重刊（業廷甲本）。 【道光】					
1840	20 アヘン戦争（～42）。		1840			
			1847	弘化4 「霞客遊記」舶載記録。		
			1853	嘉永6 ベリー来航。		
			1858	安政5 欧米五カ国と修好通商条約締結。 【明治】		
			1868	元 明治維新。		
	【同治】					
1870	9 「越縕堂読書記」記載。 【光緒】					
1881	7 「遊記」重刊（瘦影山房本）。					
1894	20 日清戦争（～95）。		1894	27 日清戦争（～95）。		
	【中華民国】					
1924	13 「遊記大綱」。群衆図書公司「遊記」（沈松泉本）。			【大正】		
1926	15 梁啓超「中国近三百年學術史」。		1926	15 暹羅麗水「新入蜀記」で言及。		
1928	17 点校本（丁文江本）、地図並びに年譜。			【昭和】		
			1984	9 小杉放庵「工房小閑」で言及。		
1941	30 浙江大学史地系による初の研究会開催。		1940	15頃 武田泰淳「霞客」。		
1948	37 「地理学家徐霞客」（1941を活字化）。 【中華人民共和国】					
			1957		J・ニーダム「地の科学」。	1957
1980	上海新整理本。		1960	35 三木克巳抄訳本。  Li Chi (李祁) "The travel diaries of Hsü Hsia-k'o"		1974
1985	朱惠荣校注本。		1982	58 「海の冒険者・陸の思索者」。		
1987	唐錫仁楊文衡「徐霞客及其遊記研究」。					
1988	呂錫生「徐霞客家伝」。		1989	元 河治利治「明末文人交友考」。  Jacques Dars (譚霞客) "Randonnées aux sites sublimes"		1998
1991	「徐霞客旅行路線考察図」。					
1997	朱惠荣全訳本。 雑誌「徐霞客研究」創刊。					
2002	黄璋新訳本。		2002	14 「食の文化フォーラム—旅と食」。  Julian Ward " Xu Xiake (1587-1641) : the art of travel writing"		2001
2004	呂錫生「徐霞客研究古今集成」。		2011	23 薄井俊二 「徐霞客遊記訳注稿——名山遊記篇（一）『遊天台山日記』」		
			2022	【令和】 4 薄井俊二 「梁啓超が見いだした潘耒「徐霞客遊記序」と李慈銘の「越縕堂読書記」について—清人の徐霞客評（一）—」		

【圖4】徐霞客の足跡

